

MTI、エンジン燃焼室内部の自動撮影装置など紹介

Monohakobi Techno Forumで講演

日本郵船と同社グループ会社で、物流技術の研究開発やコンサルティングを手掛けるMTIは、船舶エンジンの燃焼室内部を自動撮影する装置「きらりNINJA-No hands INside Just A camera-」を開発した。現在、特許を出願中。360度パノラマカメラとLED照明を装備し、全周方向の撮影が可能となるほか、高温環境の燃料室内部の作業環境を改善し、乗組員の作業負担を軽減する。

MTIは12日、東京・平河町の海運ビルで「Monohakobi Techno Forum 2015」を開催し、同社が手掛ける物流技術の研究開発の成果などを報告した。その中で、同社船舶海洋グループ主任研究員の射手充代氏が「船用エンジンシリンダー内部の自動撮影装置の開発」について講演、「きらりNINJA」を紹介した。

船のエンジン内部の点検方法には、掃気孔から内部を覗き込む「無開放点検」と、燃料噴射弁、排気弁などから成るシリンダーカバーを外



海運業界関係者 185人が聴講

し、内部に入って実施する「開放点検」がある。同装置について、射手氏は「無開放点検の手軽さと開放点検の詳細な画像を組み合わせられる撮影装置だ」と説明した。同装置によって取得した画像データは、ビッグデータの一部として、その他の運航データと組み合わせることで、状態診断の精度向上に資する。加えて、機関事故の未然防止や整備機関の最適化を図ることができ、ライフサイクルコストの低減につながる効果も期待できるという。

内航総連、9月期の建造申請18隻を認定

申請事業者を公表

日本内航海運組合総連合会は、内航海運暫定措置事業の9月期建造申請受付で認定された18隻の事業者名などを公表した(別項資料参照)。認定された18隻の船種別の内訳は、一般貨物船14隻、砂利船3隻、油送船1隻。そのうち、大型船型(1000総トン以上)は、葵新建設の2465総トン型砂利船、宗田造船の

1799総トン型砂利船(バージ)の2隻のみ。そのほかは、一般貨物船では499総トン型が8隻と半数以上を占め、299総トン型、749総トン型が各3隻となった。また、油送船は499総トン型となり、9月期も大型船の建造申請はなかった。